

「体育心理学実習」の授業評価

保健体育講座・田中雅人

1. 授業の概要

この授業では，体育・スポーツに対し，心理学的側面からアプローチする場合の方法論を理解し，体育やスポーツ場面における問題を研究するための有効な手法を習得することを目的とした。また，到達目標は，1) 情報の収集，および多変量解析を用いた解析ができる，2) 質問紙・テストの作成，およびその信頼性・妥当性の検討ができる，3) 適切な実験計画，および統計処理による解析ができる，4) ゲーム分析の目的，およびゲーム分析に必要な視点を理解することができる，の3つとした。

3つの到達目標を達成するために，体育心理学で用いられる研究法について概説したのち，1) K J法，2) 因子分析，3) 質問紙調査，4) 実験計画法，5) S D法，6) ゲーム分析の実習およびレポート作成を行った。

受講生は2年生22名であった。また，実習はすべてグループワークとし，データの配付，提出などにはMoodleを利用した。また，グループワークへの貢献度に対して，Moodle上でアンケートを実施した。評価は，実習への取り組み，実習ごとのレポート，プレゼンテーションの内容などを総合して行った。

2. 授業評価

以下の5領域・15項目に対する5段階評定と自由記述による調査を実施した。各項目の評定の平均値とヒストグラムを示した（図1）。

●理解度

1. 授業の目的は，十分に達成された。
2. 到達目標は，十分に達成された。

●授業内容

3. 授業は，シラバスに則して行われた。
4. 授業の進度・時間配分は，適切であった。
5. 授業のレベルは，適切であった。
6. 授業内容は，役に立つものであった。

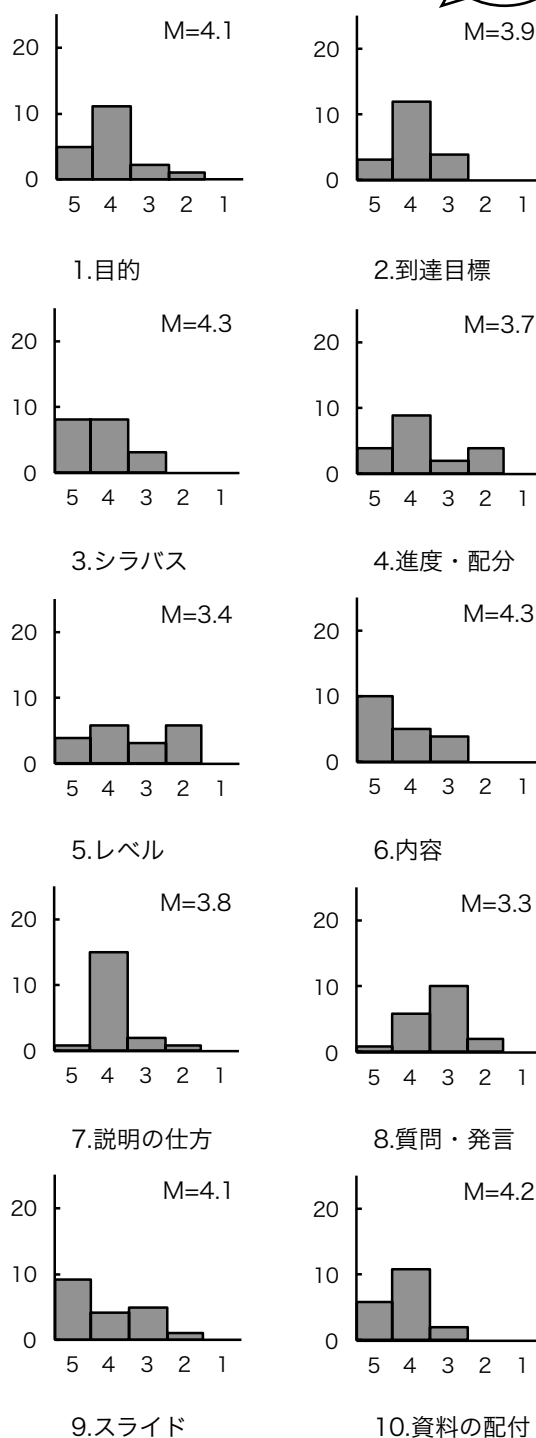
●教授方法

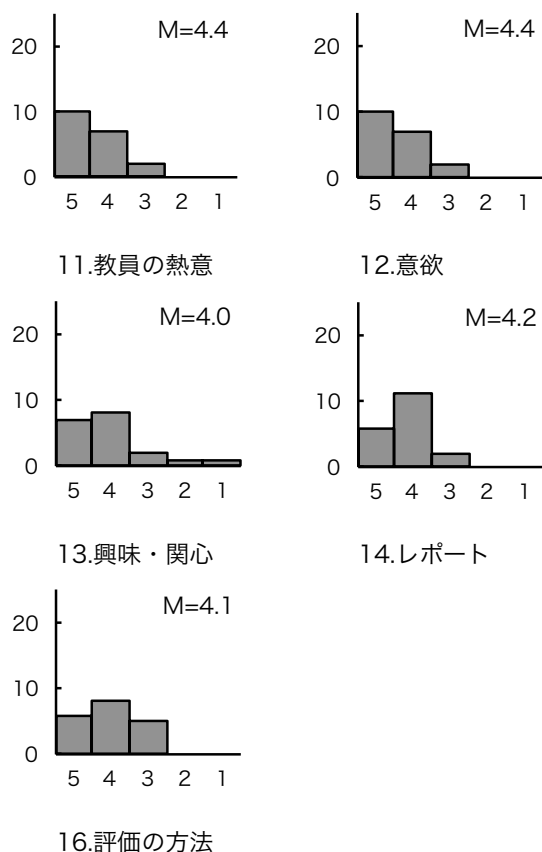
7. 説明は，わかりやすかった。
8. 質問や発言の機会が適切に与えられていた。
9. スライドの使い方は，効果的であった。
10. 配付配付資料の使い方は，効果的であった。
11. 教員の授業に対する意欲・熱意を感じた。

●受講生の意欲・関心

12. 授業に対して意欲的に取り組んだ。
 13. 授業の内容に対して興味・関心があった。
- 評価に関わるもの
14. レポートの内容は，授業内容に則していた。
 15. 評価の方法は，適切であった。

図1





1) 理解度

評定値が4.0前後となり、目的・目標は、概ね達成された。自由記述にも「実践的にレポートを作成したりすることで、大変役に立った」などの記述がみられた。

2) 授業内容

「3.シラバス」と「6.内容」の評定値は4.0以上の高い値を示した。授業の最初にシラバスを提示して全体の流れを把握できるようにし、また、授業がほぼシラバス通りに行われたことから高い評価となった。一方、「4.進度・時間配分」と「5.レベル」の評定値はやや低い値となった。自由記述にも「実習のレポートが毎回あって忙しかった」「レポート課題の説明を詳しくして欲しい」「授業を休むと実習の内容がわからなくなり困った」などの記述がみられた。一部に、授業内容が難しいと感じている受講生もいたことから、実習の手続きの説明、分析方法の解説などについてさらに検討することが必要である。また、欠席者への対応も考えなければならない。

3) 教授方法

この授業では、スライドと配付資料を用いた。また、配付資料は1回目の授業時に一括してまとめて配布した。「7.説明の仕方」と「8.質問・発言」を除いて4.0以上の高い値を示し、実習の手続きを配付資料にまとめ、スライドを用いて説明する方法はわかりやすかったようだ。一

方、「8.質問・発言」の評定値は3.3とやや低い値を示した。この授業はグループワークが中心であったため、グループ内での発言は多くみられたが、教員に対して質問・発言する機会が少なかったためだと思われる。また、グループ単位で実習を行うことについては、受講生に好評であった。「他の人と協力できるので理解が深まった」「他者の意見を聞くことができ考えが広がった」など肯定的な意見が多かったが、「しっかり活動する人としらない人の差が大きい」など少数ではあるがマイナス面を指摘する受講生もいた。グループ内での個人評価の方法を検討する必要がある。

4) 受講生の意欲・関心

「12.意欲」の評定値は4.4、「13.興味・関心」は4.0と高い値を示し、「内容は面白かった」「意欲的に取り組めた」などの記述がみられた。

5) 評価に関わるもの

「14.レポート」、「15.評価の方法」とともに評定値は高く、評価方法は、概ね妥当であったと思われる。なお、「レポートが難しかった」との意見もあり、次回は再検討したい。

3. DPとの対応

この授業と対応しているDP1AとDP1Bに対する評価を示した(表1)。

表1

	DP1A	DP1B
①このDPとは無関係であった	0	0
②あまり貢献しなかった	0	3
③貢献した	13	9
④十分貢献した	3	4

(人)

DP1A(教育に関する知識の修得)とDP1B(得意分野の専門的知識の修得)のいずれに対しても概ね「貢献した・十分貢献した」という評価となった。授業の目的が、体育・スポーツに対する心理学的な研究方法について理解することであり、特定の競技に偏らず、一般的な手法について実習したことからDP1Bの評価がやや低いものになったと思われる。

他のDPはこの授業と直接対応しているわけではないが、いずれもDP1とほぼ同じで、概ね「貢献した・十分貢献した」という評価であった。

3. まとめ

グループワークによる実習は概ね好評であったが、不公平感を抱いている受講生もいたため、次回は評価法を工夫したい。また、データの収集や入力など授業時間外の課題も多く、受講生に過度な負担にならないよう留意したい。